

2022年2月21日

令和4年度(2022年実施)試験「地理B」について

1. はじめに

令和3年1月より、大学入試センター試験(以下、センター試験)に代わって大学入学共通テスト(以下、共通テスト)が実施された。この変更を定めた「大学入学共通テスト実施大綱」によって共通テストでは「各教科・科目の特質に応じ、知識・知能のみならず、思考力・判断力・表現力等も重視して評価」とされた。同様に、問題作成方針では地理は「地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視」し、「地理的な諸課題の解決に向けて構想したりする力を求める」ために、「思考の過程に重きを置きながら、地域を様々なスケールから捉える問題や、地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり、資料を基に検証したりする問題、系統地理と地誌の両分野を関連付けた問題」を検討するとされている。

これらをふまえて作成された令和3年度・4年度(以下、R3、R4と表記)実施の共通テストでは、従来のセンター試験と比較して大問構成の再編や新形式による出題によって、地誌分野の扱いの変化や、組合せ(語句の組合せおよび正誤の組合せ)形式の増加、出題形式の複雑化が特徴としてみられた。

以下、令和2年度(以下、R2と表記)センター試験(本試験)、R3共通テスト(第1日程)、R4共通テスト(本試験)を比較し、こうした特徴が前述のような評価方法・問題作成方針に即した変化といえるのかをみていくものとする。

◎基本情報と問題構成

まず、R3、R4に実施された共通テストと、R2センター試験の平均点および受験者数は以下の表の通りである。

実施年度	試験名	平均点	受験者数(人)
R2	センター試験 本試験	66.35	143,036
R3	共通テスト 第1日程	60.06	138,615
R4	共通テスト 本試験	58.99	141,375

これらを比較すると、地理Bではセンター試験から共通テストの移行時に平均点が6点ほど下がり、R4においても下降傾向にあることがわかる。

次に、R2～R4に実施されたセンター試験および共通テストの大問数などの問題構成は以下の表の通りである。

実施年度	試験名	大問数	設問数	解答番号	ページ数	図表点数	最大選択肢数
R2	センター試験 本試験	6	35	35	34	37	6
R3	共通テスト 第1日程	5	30	32	34	37	8
R4	共通テスト 本試験	5	30	31	34	39	8

全体の構成については、大きな変更点としてセンター試験から共通テストで大問数が全6大問から全5大問に削減されたことがあげられる。従来のセンター試験では、学習指導要領の区分に沿った「自然環境」「資源、産業」「人口、都市・村落/生活文化、民族・宗教」「地図の活用と地域調査」といった各項目に対応するテーマを全6大問で問うていた。特に第4問、第5問では世界の地誌および比較地誌が出題され、第6問で日本国内の地域調査が出題されるのが定型となっていた。しかし、R3以降の共通テストでは、大問のテーマなどは前述のセンター試験から変化はない一方、世界の地誌を扱っていた第4問と第5問が統合され、1つの大問として再編された。

また、設問数についてみても、大問数が削減されたかわりに設問数が増加したということはなく、R2センター試験からR3共通テストでは設問数が35から30に減少し、R3以降の共通テストでも設問数は30を維持している。よって共通テストでは実質的に大問が減ったことに連動し、設問数も減少しているといえる。ただ実際の解答数については、共通テストでは異なる設問で1つの選択肢を共有している場合など、1つの選択肢から複数の解答を必要とする形式や、枝問形式の出題がみられる。そのため解答数は、設問数よりは減少の幅が小さい30～32個を推移している

このように、設問形式をみるとセンター試験から共通テストにかけては大問数も設問数も減少していることがわかる。かつての世界の地誌にあたる1つの大問と設問数の分だけが減ったため、地誌を問う大問の扱いの変化が共通テストでの特徴のひとつといえる。

加えて注目したいのは、問題冊子のページ数はいずれも34ページから変化がないことに対して、問題中に使用された図表点数は年々増加傾向にあることである。この傾向はつまり、設問1つあたりに使用する図表点数も増加しているといえる。たとえばR3共通テストでは、すべての設問に図や表が用いられており、センター試験で出題されてきた選択肢の文章選択の問題などの図表を用いずに解答が可能な形式はみられなくなった。図表の詳細についても、似たような形式の図表が増加したわけではなく、形式は多様で、いかに図表を読み取らせるか、について各設問で複雑化したといえるだろう。ただ、この点に関しては一部の設問では図表の読み取りのみで解答ができる設問や、図表の読み取りが解答のヒントになる設問も散見されるため、全体の難易度への影響はそこまで大きくないと考える。

こうした状況で1つの設問に対して複数の図表の読解が必要とされたために、図表に対応する事柄についての組合せ形式が増加したと考えられる。組合せ形式の選択肢では組合せる要素が増えると選択肢の数も増加するため、各設問での最大選択肢数はR2センター試験では最大6個であったのに対し、共通テストでは8～9個であった。共通テストでの平均点がR2センター試験よりも低くなっているのは、試験時間内に資料から読み解く事項が増加したために、1問に対して十分な考察の時間を割けなかったという形式面の影響もあるだろう。

以上のことから、地誌分野の扱いの変化、資料などの図表点数の増加による出題形式の複雑化や、組合せ形式の増加が共通テスト地理Bにおける変化の大きな特徴として挙げられる。以下、各特徴がみられた問題を例に、詳細にみていくこととする。

2. ポイント解説

◎地誌分野の扱いの変化

地誌を問う問題に注目すると、地誌に関する大問が2つから1つに削減された共通テストでは、

大問内での問題構成に2種類がみられる。

R3 共通テストではアメリカ合衆国の地誌について設問7つが展開され、州ごとの特色など詳細な資料を用いた出題がされた。これはセンター試験では異なる国を比較していた地誌分野を、1つの国を大きな視点でとらえた地誌と、州のような小さな視点でとらえ比較した地誌を扱ったものと考えられる。対してR4 共通テスト第4問では、前半ではラテンアメリカの地誌の設問を4つ、後半ではチリとニュージーランドの比較地誌を設問2つで展開された。これらの地誌は、センター試験であればそれぞれが大問1つずつとされても違和感のない題材である。共通テストでは、問うべき事項と設問数が絞られつつも、センター試験の大問構成が踏襲されていると思われる。

また、第1問の世界の自然地誌にも変化の傾向がある。従来のセンター試験では第1問の図1として世界地図が示され、その地図中の各地点について世界全体で比較をするような設問が展開されることが多かった。これに対し共通テストの第1問では模式図や各地域ごとの地図の出題が見られ、世界の中の各地点よりも地域ごとの特色を問う傾向がある。R4 共通テスト第1問は各設問ごとに異なる地域が設定され、それぞれの地域の地誌を問う大問の自然環境の分野として出題されても違和感のない設問が続いている。従来の大問1では自然地理に関する知識について、世界全体を例に出題されることが多かったが、共通テストでは地域ごとに観察される各現象や自然環境の特徴を俯瞰し、考察させる出題となる傾向がある。これは地誌に割ける設問数が減少したこととあわせて、世界の自然環境に関する知識について、気候、植生、土壌など各種条件をふまえたうえで考察させるための変化といえるだろう。

こうした地誌分野での変化は、より思考力をもって地誌を考察させ、作成方針に掲げられた「地域を様々なスケールから捉える問題」や「系統地理と地誌の両分野を関連付けた問題」を意識したものと考えられる。

◎組合せ形式の増加

設問形式に注目すると、共通テストでは組合せを選択する設問形式が増加した。組合せ形式の設問数について、R2 センター試験とR3 共通テストを比べると、全35問中11問から全32問中20問に急増した。以後もこの傾向は継続し、組合せ形式は全問題中20問程度出題されている。共通テストではいずれも全体の3分の2程度が組合せ形式となった。

センター試験においてみられた、選択肢のうち語句や図から1つを選択させる1語選択の形式についても、組合せ形式に変化したものが共通テストではよくみられた。例えば、図と説明文の組合せを問う形式(R4 共通テスト第3問問5)や、雨温図などの図中に判別要素を増やして組合せを問う形式などがある。特に雨温図やハイサーグラフでは、1つの地点の気候の特徴について選択肢を判定し、該当するグラフを選択する問題は共通テストでは減少傾向にある。

従来のセンター試験では、ある地域の降水量や気温についての設問は、複数の地点のグラフを用意し、それぞれ当てはまる地点を答えさせるような問題であった。しかし共通テストでは、その地域の気候の特徴を把握したうえで大気や気候、土壌や植生の間にどのような因果関係があるのか(R3 共通テスト第1問問5)や、オーストラリア全体における1月および7月の気温または降水量を図中の縦と横の要素として示し、地点ではなく地域といった広い視点で気候を考察させる形式(R4 共通テスト第1問問4)への組み換えがみられた。

こうした2つの要素の正誤が4つの図に落とし込まれた形式は、人口ピラミッドの判定についても採用された。人口ピラミッドの判定については、かつてのセンター試験であれば4カ国（A国～D国）の人口ピラミッドを示したうえで、A国に該当するものを選ぶような出題がされ、こうした形式ではこの人口ピラミッドの形を示すのはこの国、といった単純な図形の暗記だけでも対応できた。しかし、R4 共通テスト（第3問問5）のようにドイツとシンガポールのどちらか、国全体の人口構成か、外国生まれの人口構成のどちらかをそれぞれ判定させる形式では、その国の人口ピラミッドの特徴とともにその国の人文地理的知識や外国生まれの人口の特徴も踏まえて判定しなければならない。そのため、従来知識の暗記では解答が難しく、より思考力が求められる形式になったといえる。ただ、図表の読み取りによってある程度の判断が可能のため、断片的な知識と推測からでも解答が可能という面もある。これを知識偏重の問題から思考力重視の問題への移行と考えることも可能だが、1問に必要とされる知識の深度という観点からすると、センター試験の方が解答に必要な知識は多かった印象がある。

R4 共通テスト第5問問5ではさらに、資料の読み取りから人口ピラミッドの示した地区と左右のグラフの示した年代を考察させる形式が出題された。R4 共通テストでは人口ピラミッドを用いた問題のバリエーションが多く示されたといえる。

こうした変化は作成方針の「地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視」し、個々の国にとらわれない「様々なスケール」を比較し、思考させるためと考えられる。従来知識を確認するだけ、教科書の暗記だけで対応可能であった設問と比べ、思考力・判断力が問える設問として、成果が期待できる形式であろう。

◎出題形式の複雑化

共通テストでは組合せ形式など設問形式の変化のほかに、センター試験ではみられなかった出題形式がみられる。以下、共通テストに特徴的な出題形式の問題2点をあげる。

①模式図や仮想条件を示し、考察させる形式

共通テストに特徴的な出題形式として、模式図や仮想条件から考察させる設問があげられる。模式図を用いた出題はセンター試験でもみられたが、共通テストではより概念的な模式図（R3 共通テスト第1問問1）の読み取りが必要とされている。模式図についてはR4 共通テストでは見られなかったが、一般の地図よりも読み取りに思考力を要するため、共通テストでは今後も出題されると予想する。

仮想条件から考察させる出題は特に「人口、都市・村落/生活文化、民族・宗教」を問う第3問で出題され、R3 共通テスト第2問問3などで複数みられた。こうした形式はセンター試験には見られず、共通テストで新設された形式であるといえる。ただこの形式はR4 共通テスト（第3問問3）では若干の変化が見られ、実在の都市を「ある都市」として例にあげ、現実社会に近づけた出題がみられた。

この設問ではジェントリフィケーションの概念を設問文にて説明したうえで、「ある先進国の大都市」に与えられた4つの指標が示された図を元に、ジェントリフィケーションがどういった地区でみられるのか、といった定義ではなく現象として考察できるかが問われた。

従来のセンター試験では都市の諸問題としてインナーシティ問題やジェントリフィケーション

がみられる都市名や概念の説明文の正誤を問う形式が主要であったが、共通テストでは定義の確認や語句の判定から発展し、実際の社会に目を向けた考察が解答に必要とされた。また、都市が実在のどの都市であるかは判定に関係ないため、仮想の地域と置かずに実在のとある都市から何が読み取れるかを問われた。これはタイプイ（R3 共通テスト第3問問6）など具体的な都市について考察させていた形式と、仮想の地域から推測させていた形式（R3 共通テスト第2問問3）とともに、読み取らせたい事柄によって使い分けがされていると考えられる。

受験者にとってはジェントリフィケーションの定義については既に設問文に示されているため、ジェントリフィケーションが何を指すのかだけを暗記していた場合は対応が出来ず難しく感じたかもしれない。しかし、仮想条件または現実のある都市を想定させて諸問題を提示する設問は、作成方針の「地理的な諸課題の解決に向けて構想したりする力」によって思考や判断することを必要とするため、共通テストで評価したい能力、その能力をはかるための方針がともに噛みあった形式の出題といえる。

②生徒の学習場面を想定して、作成した資料に当てはまるものを選択する設問

提示された資料から読み取れる事項を問う形式もセンター試験から共通テストにかけて新設された形式である。R4 共通テスト第2問問6では、循環型社会に向けた持続可能な資源利用の課題と取り組みについてまとめられた資料を用いた問題が出題された。しかし、ここで示された資料は設問に関連してはいるものの、解答するうえで必要となる情報がカード状に示された選択肢のみであった。こうした形式であれば従来のセンター試験のように、設問文の直後に各国の取り組みを説明した文章を4つ並べ、そこから適当でないものを選択する、というような形式で出題しても解答に支障はなかったと考える。資料が示されたがために、資料の読み取り問題だと思っただけで問題に挑んだ受験生にとっては、資料が設問を解くうえで必要ではないためかえって混乱する可能性もある。今後、生徒の学習場面を想定した出題をする場合は、安易に説明文をカード状に示して資料とするのではなく、資料自体にも解答するうえで読み解く必要のある情報を加えるなどの工夫が求められる。受験生にその資料から何を読み解いてほしいのか、目的を明確にした資料問題となるよう、今後の改善が期待される。

3. まとめ

R4 共通テストは、従来の共通テストやセンター試験と比較して新しい形式による出題や大問構成の再編があったものの、大問内容、設問内容に大きな変化はなく、全体としてはゆるやかな変化がみられた。センター試験とR3以降の共通テストを比べても比較的スムーズな移行がされていると思われる。変更点としては、地誌分野の扱いの変化や、設問形式として組合せの増加、出題形式の複雑化があげられる。こうした変化は共通テストにて評価対象としたい「思考力・判断力・表現力等」を意識した出題であり、出題方針にも適応した問題であったといえる。現状の共通テストは、センター試験での蓄積を活かしつつ、これから重視すべき能力の評価にむけての変革にある程度成功しているといえるだろう。

しかし共通テストでは、結果的により多くの要素をより多くの選択肢で問う傾向がある。1つの設問を正解するには複数の要素の判断が関わるため、組合せる要素には十分な検討が必要だと

考える。

未来に目を向けると、R4 から新学習指導要領に移行し、令和7年度共通テストから地理A／地理Bは地理総合／地理探究に代わる。共通テストの方針と新学習指導要領とを見るに、センター試験から共通テストの移行の次の課題は新学習指導要領の下で学んだ能力に対する評価であると考えられる。そのため、令和7年度共通テストからの新学習指導要領の導入を含め、今後の動向を注視したい。

参考資料

- ・「令和3年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト実施大綱」文部科学省ホームページより
- ・「高等学校学習指導要領」文部科学省ホームページより
- ・「令和4年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」大学入試センターホームページより
- ・「令和4年度大学入学共通テスト実施結果の概要」大学入試センターホームページより